



扶桑皇統記圖會

後編

一下

13  
2472  
3





2472  
8



扶桑皇統記圖會後編卷之壹下

金窪義心贈于敵曹 瑞雲禪師化度安達條

官軍ハ昨日の軍小數多士卒を亡ハ手負多を再び敵之伐命ヲ義勢カ兵糧も乏ク々々を京都(飛馬)於テ益々不覺と松加勢及ハ兵糧を乏ク々々出ル小賊方の勇將金窪兵太ハ戰場小咽小流箭を受我陣小帰テ矢疵を瘡せしれも急所あれ痛甚ク命生得とも覺(れ)兵太士卒亦命を昨日日接取リ矢を寄テる漆を以テ大和國の任人廣瀬八郎勇と紀リたる兵太嘆息シ此矢の至の剛臆ハ知れも金窪程の勇士小矢を射中ス武運小叶ヒ者ナリ矢東と見テ小兵も思ハれ高名と人亦モ残念ナリとて其矢小我者シる胃を添テ即黨の中ハ心利シ者小持セ如此ニ言ハとて玉造の敵陣ニ遺シる其者京方の陣ニ往案内ニとて大将征繩ノ前



小出某いさだ金窪兵太かねくぼへい組下の者ぐみしたのもの主将兵太しゅしやうへい義昨日戰場ぎけふのうまば咽のど流矢ながれや受矢うけや  
 を檢ありし小廣瀬八郎ひろせはちらう勇ゆう紀きあり依よて金窪程かねくぼほどの者もの小大夏おほなつの手て肩かたせし高たか  
 名なと世よ上かみ知しせざるも殘念ざんねんの心こころ御賞ごしょう翫くわんの心こころすまざるも名な惜おしむ武士ぶしの本意ほんい  
 小任まうせ受うける矢や小着ちやせ兎う添そて贈たまひかり此由このよし御中ごちゆうあり其主そのぬし御渡ごわた給たまる  
 るらと慇懃いんきん相演あひのやるれる経繩つづな大おほ感かん東夷あづまの義ぎも耻かたじけなく知しるると流石さすが  
 名な小負おのこ勇士ゆうしとて之これも優まれ志感しかんなる小余おのこあり武士ぶしと人ひと者ものむも斯このと有あり  
 とこれと即すなはち尅く古佐美こさけみの麾もと下した小属おのこせ廣瀬八郎ひろせはちらうと名な出でて金窪かねくぼが志しと三日みか度ど  
 せ矢やと兎うを渡わたし使者しや小引ひき出物いでものを予あたへ兵太へいとて金窪かねくぼの膏かう未まと渡わたしと帰かへ  
 される其後そのち矢やと胃いと取毒とくどくてんんる小実おのこも比深ひしん小射おのこなりとんえて矢落やのち血ち小  
 深しんく次つぎ小胃いと提ひげげるる小大剛おほたけいの者もの著ちやせ兎うとて甚まか行目ぎやうもく重おもく容易やすく  
 揚あげるとるれる愈い愈い感かん心こころありて廣瀬ひろせの褒賞ほうしょうとて太刀たち一振ひとふり支さられるれる八郎はちらう押頂おしあたま

て涙なみだを流ながし金窪かねくぼの夫おとこ不當ふたうの剛たけいの者ものと承うけりししも斯程このほどすて武道ぶだうの義ぎを重おもん  
 むる者ものと思おもひひむむ其身そのみの仇あだる某たれの高名たかと人ひと知しせんんと此二品このふたひんを贈たまひ心の注すり  
 さん真まの大夫おほおとこ夫おとことや金窪かねくぼの妻つま碌ろくくも某たれの不及およばずとるるふふれれ此二品このふたひんは  
 子孫こそんへ緒州おつしゆうの種うけ小注おのこ清きよいい也なり即廢美おつあづみの脚あし太刀たちと心こころおろし脚あし及進あしししるる其敵そのあだは  
 全まく某金窪かねくぼを自當みづかみ射いる夫おとこも無なき敵あだの襲おそひ来きるる或防あるはんんを放はなしし  
 一矢ひとや不測ふそくの金窪かねくぼの中なかひひく偶たまに手柄てがらありて其高名そのたかととやととて  
 辞退しじたいして退たいれる此廣瀬ひろせも又心こころある武士ぶしなりと皆俱みなともに感かんじじるる大将おほしやう経繩つづな今  
 度の敗軍たいぐん小就おのこ熟思じゆし惟ただせんん何分なにぶん敵あだの地理ちり小精せいく味方あじの土地ち不安ふあん内うち  
 て奇兵きへいを用もちむ小不便ふべんあれ何卒なにぞ心利こころる國人こくにんを召抱めいむむ事こと其入そのいをを求もとめ  
 られる茲こゝ小奥州おほおくしゆうの産うぶ小安達あんだ八郎はちらうとり強盜がうとう有ありり當國たうこく信夫しんぶ郡ぐんの農民のうじん乃  
 子こわりりなるる生得せいとく力飽ちからまで強つよく腕うでと好このむ心放こころ湯たうふて農業のうぎやうと嫌きらひひ十四五しよご



の頃より父母の家を出て悪徒の群小入あるも悪業とかりたるが強力なる上弓馬抄物の業少も達しれを悪徒ども八郎伏従する者多し八郎遂に強盜の巨魁となり。猪方の富家へ推入し金銀財宝を奪掠り深山小巢穴を構て住居する。其名隣國まで隠れり。伊治世に官安達を度く味方招けども八郎是不應せむ。只知盜を更くとせよ。心を送り多し。一時配下の賊徒を將し信夫郡山村の御なる豪民の宅へ押入る。此家の至六所の吏官の縁者りりる由へ其方へ人を走せ盜賊の押入る由と告ぐ。吏官即時小下吏及六村の腕を好む者大勢驅集て強着折しも十五夜小月明れし。猪小下知して盜賊を追拂んとする。小安達八郎小高た所小床机を立て腰打ち。螺吹せ太鼓をかせ其身小探を揮て小賊小令と傳る。更恰も老練の軍師の士卒。然指指たる小異あむと進退よく法小合て間小髪を容されを吏官の手り

者散く小捲りし。この頃の体小く逃退く内小八郎十分小財宝を奪取し。一房の螺を吹鳴を相圖とて群賊を班り徐くと引取て己が柵歸りたる。八絨小世小布なる強盜りりる。茲小奥の國府小近た所小觀音寺と号する梵宇有る。其任侶を瑞雲禪師と号し。道德高た僧あり。諸人信仰し。藤原継繩も在陣中折し。觀音寺へ参詣し。瑞雲禪師の教化を深く尊信せし。瑞雲和尚一夜書見して居られ。この小個の大漢入来り。和尚向ひ礼をなす。明貝某が亡父の二十五回忌の忌日小當り。何卒脚吊小預り。とて従者小持せし。畏り寄し。十兩許の砂金と猪布五端を布絶物小として。出り。和尚是をみて。心中小此男の風跡。て斯過分の布絶を引。其意を得。盗賊などやと疑ひ。色小見。其とい。殊勝なる。更。僧の役なれを吊て進ぶ。但し亡者の法名。何と影向し。絶至の名。何と紀と。絶死



やと向まくる小石七父の法名を某知いんを子細有て若年の頃父母の家と出く  
 其死期も不知今年二十五年の年思ふ當るまでいんが亡又母の冥福を申  
 ひし更もいんを法も星霜押移り身も初老の齡不及つれ又母の思義を  
 思ひ今までの不孝悔て及せせ其年忌を吊んぬ和尚の高徳を史傳  
 今夜御頼やさんら推察いんわりと語る禪師まを御身の名斗かり  
 とも度帖日記やまをと言れれを大漢時思惟しまを女達某と記  
 し給るを言ると言るをぞ禪師まを社凡庸おじと思し小果て國中の隠と  
 ろれ劫盜安達八郎にて有ると覺あが左わぬ体にて施物をねめ本堂へ  
 伴ひ煙ろ小姪を續編し吊ひの佛吏終りて後方丈(諸)と湯漬を進めたと  
 し談話の序小禪師安達小向い貪道(出家)の義あれを方更心置か物語り  
 の人御身の風跡武家とも見えず市人農民とも尚思われを由ある方ふこと今を

つま 包む御名と名告られいとやされぬを大漢が曰某幸ひ有て今夜善知識小見  
 なる上も罪障懺悔のち名告いん。実安達八郎と不良業と為者小い  
 穴賢他の人某が名を漏しぬと口止する禪師點首争り余小洩いん  
 れ拙僧も安達某とやされ時より夫と推量しせり此佛場(来られ)佛縁乃  
 深れとろかれ拙僧の愚案と演いん。凡世上の人小初より不善人なり皆若  
 羊の血氣小任せ悪れ友小交り其所為の做ひ何り悪道(入無量の罪をも  
 造るなり)人間の一生小百支を保し稀あり僅ある夢の世を送んてあくる英雄乃  
 身と狗黨の群小沈め人を殺し火を放ちて暴悪の名を遺されん更久きぐも  
 朽惜れ御辺の勇智と以て公小事(國家)の為小忠戦を励まれあを帝王の為  
 小忠臣と賞せられ又母先祖の為小孝道まねる。美玉を泥土埋む最惜  
 るるがれ更あもむと理を竭して教化ありを八郎感伏し美く難有御教示



小預り迷の雲霧霧奇の某若年の頃何の弁もあらず。放逸橋奢と好吏と思  
 親の疎世の緋をも厭む悪友小誘れ竊盜を業とす。遂小其巨魁とたり  
 人の財宝と奪掠めく僅小口腹を富せ。更今更慚愧不堪いれども今ハ  
 偷次皿の名を通る小道なく奈何も致難れを悪と知れも悪をみ。只刃  
 の首小望を待のふいゆ和尚の大慈悲小因て公儀の下吏も用ひらる道ハ  
 大馬の旁と辞せども奉公いことゆいと誠心面小見りて言々る小と。禪師大ハ  
 感い。さる存念あを万更拙僧小任されい為悪く計り。先哲時當寺小身  
 を忍びて居らる奉とて。夫より安達を舎藏置翌日征東使継繩の陣所ハ  
 到り密小對面して當國小隠れ安達ハ即と強盜の首領のいが亡父の吊ハ  
 在頼人と拙寺ハ参りいゆ其善量と弑い小人表衆小勝を膽略す。秀中ハ  
 此竊盜をかすぬれ者あをい依て種く教化いを渠も生涯狗黨の群小誘

果人更と厭い今までの悪業と悔の罪を赦し召抱る至君あを大馬の旁と  
 辞せども奉公とぬれすやい君兼て當國の地理小熟せ者あを召抱とれ  
 脚中ぬれ彼安達を扶知り更ハ偷盜を業とすい由當國ハ小及と近國  
 の地理の達し物も知男と兼備せ者あをい。自然軍功を立す。安達  
 も成い布と勧めぬ。継繩大ハ悦是予兼て望む所なり。其者先非と改て  
 予小奉公とるどあを。予亦其功小従ひ追て執立遣とて。和  
 尚始び立歸て安達小右の由を告夜中小伴ひ。継繩の陣館へ赴たハ即と見え  
 せえ。継繩安達が堂たる骨柄をえて深く悦び至従の契物せれ。安達  
 三拜して恩と謝し。山塞より老母と迎へ小賊の中めて物の役小立ぬれ者ハ呼とて  
 家へ。是より非と改め家人を以て近郷の盜賊を防ぎ。國府の近辺ハ  
 盜難の患ひなく。緒人大ハ心を安んずと悦び。



桓武天皇御即位 苦肉計畧安達燒敵柵條

宝亀十二年皇都小伊勢の神官より表と捧げ當春より各宮の社の上は五  
 彩の雲現れ四方の天小耀れいと奏上りたる帝歡慮麗く百官と召集  
 ひ今般伊勢の各宮小五色雲現る多吏是天より祥瑞を示しりてと  
 年号と改り天應元年と改えざる然も五穀もよく登り東國の賊徒も程あ  
 く殊小休むを。然し此議如何有べと勅問ひしを。左右の大臣と先く一  
 の月卿雲客冠を傾け二月小拜賀。陛下徳を脩り万民を恤めよ。天  
 より祥瑞を示しりてと年号改元の儀緘小宜くいと回奏しりて小より帝中  
 喜悅在り即ち宝亀十二年正月小天應元年と改り玉ひ天下小大赦行れ囚獄と  
 赦し放し遠嶋配流の者と徴還されるも。万民皆君の御仁徳を感悦し世上何  
 となく賑ひたる時小帝又群臣と召集り詔在るは昨年奥州より加勢兵小兵糧

を乞ふ由(兵糧の儀)東八國(觸渡)加勢小藤原小黒大景命三千余騎を  
 授け東國(下)小黒大景途中病小深引返せり別小加勢の大將と  
 人を選りて其機小當る者を得。且朝勢繁く宇下時日を接  
 せり然小黒大景疾病平愈せり由を再小黒大景節持せ三千騎を授  
 けて奥州(下)向せり坂東八國(小)兵糧運送の遲滞を責急く兵糧を送  
 せり中渡せり緒臣下謹で勅詔を奉り即ち藤原小黒大景と重て  
 持節征東大使と三千余騎と授けし小黒大景奉りて天應元年二月都  
 足して東國(下)向りて禁廷より東八國(昨)年の忘り成せり大急小奥州(兵  
 糧)と送るなり觸渡される由(八國)の輩大急此度(兵)糧をよ綱  
 國より奥州(運送)しり。斯て都光仁天皇天應元年三月初頃より中  
 不例小(朝)政を聞食も懶く思召三公九卿と御拜儀ありて宝



位を皇太子山部親王承継らせり。是を皇五十代の天子桓武天皇と申  
 奉る。即ち御即位の大禮を執行せしめ、伊勢太神宮勅使を遣はし、御受禪乃儀と  
 告せられ。御弟皇子早良親王を太子とす。内大臣藤原魚名を左大臣、博  
 多の此頃、左右の大臣を並置せられ。左大臣右大臣二人して政を執行し、大  
 納言一人、是相副く。政事を佐る。抑桓武天皇と申せしむ。御緯、日本  
 根子皇統、珍照尊光仁天皇弟の皇子とて、御母高野夫人とす。高野は経の  
 女なり。桓武天皇天性、御孝心深く。又儒学を尊び、佛法信じて、其も御大量  
 小く、勇氣厲く、武臣と誅て、馬兵法を勵む。学めり。其進む者と登用し、其  
 怠る者と拙けり。是る名君なり。奥州在陣の緒将の怠慢を責、火急小功  
 成さず。下りの勅書とて、征東使と下され。却、奥州在陣の緒将、都より加勢を  
 も下され。兵糧をも送られ。如何なる故とて、時々集會し、評議せらる。

かく賊徒、殊伐の儀、八須更見合々。此上、京軍少不足と心給。日夜、徒  
 黨の悪徒、小指揮とて、近郡遠郷を侵し、掠りさせ。已に美女と近着、酒宴遊興、小  
 耽り、憚る所なく、歡樂と究々。去程、小室龜十一年、暮明を改元あつて、天  
 應元年とかり。三月下旬、小藤原小黒名加勢とて、三千騎を得て、着到、東  
 八ヶ國より、追々兵糧を送り、緒大将、士卒を以て、大い勇と悦び、銳氣を  
 生ぜしむる者なり。此上、一命と抛て、賊徒を殊伐し、大君の宸襟を安んず。是と  
 改めて、軍勢を調煉し、日々集會して、専ら合戦の評議を所し。四月、中旬、桓  
 武天皇の勅書と捧て、勅使下着有れ。緒大将、謹て是を迎請し、勅便先  
 新帝御即位の嘉儀と演次、小詔書と出と、續々と其を其文、曰  
 征東使、小勅とて、使等延遲とて、既、小時宜を失ひ、將軍等、發起して  
 久く、日月と経る。集る所の歩騎、數千人、加勢、賊地、入期、上奏する。



事度多し計已らむ狂賊を平珍とす。而も夏六州成り征討をなす  
 とし冬八雪深く誅伐せしむ。其心則ち何の目も賊を誅し國を復せん  
 方小將軍等賊の爲に欺れ緩急して此逗留を致し人馬疲て何を  
 以て敵に對せん。良將の策豈如此あるや。宜く教諭を加へ意を征討  
 小存せよ。若し今月を以て賊徒を殺尽すと更だ能む退て。賀玉造の  
 要害小籠り能防禦と加へ兼て戰術を練令しと云々  
 勅使勅書と續終るを。繩以下深く。愧恐を記命畏り奉り。此上六軍略を  
 定め不日賊徒を征伐し勝軍と奏し。もくは。間此旨。脚飯洛の上。回奏し。あ  
 と申され。勅使承諾し。玉造を以て都へと上られ。斯て。繩。小黒。名。と軍  
 儀を定め。近日出陣せしむ。其手賊をかり。多し。忍ち。不時の故障。出来し。多  
 其根元を尋る。小彼賊首。安達八郎。繩。小奉。公。と。初の程。身と。纏り。釘。を

早して諸吏慎む。勤められ。繩を首と。諸士も是を。答。々。う。小。その  
 頃。繩。の。武。庫。小。藏。する。金。造。の。太。刀。并。小。秘。藏。の。甲。冑。亦。紛。失。し。多。る。小。と。勤  
 番の者。大。小。孩。丸。主。君。斯。と。松。丸。を。繩。其。怠。り。成。叱。り。多。く。儲。言。る。是。外  
 より。賊。の。竊。入。り。次。血。取。り。小。あ。ま。る。下。り。下。の。者。の。所。爲。小。疑。ひ。あ。り。内。小。穿  
 鑿。を。穿。し。又。國。岳。源。吾。小。内。穿。鑿。の。更。を。命。じ。多。る。依。て。源。吾。種。く。手。と  
 廻。り。其。盜。者。穿。鑿。を。と。れ。ど。誰。が。所。爲。と。も。知。ざ。り。多。り。茲。小。安。達。八。郎。が。家  
 へ。一。日。大。小。酒。を。過。り。酔。狂。し。不。法。の。義。を。あ。ま。る。由。八。郎。大。小。怒。り。散。り。小。歩  
 懲。り。衣服。を。剥。赤。裸。し。と。白。昼。小。追。出。し。其。者。大。小。忍。ん。其。後。國。岳。源。吾  
 が。許。し。内。小。入。れ。更。の。い。と。言。々。る。小。より。源。吾。出。て。な。れ。む。下。郎。と。覺。れ。者  
 髪。と。乱。し。赤。裸。す。く。肩。背。血。を。く。収。痕。あり。れ。甚。く。釘。り。子。細。を。向。小。頭。小。ハ  
 中。に。密。小。上。り。と。言。ふ。と。殊。異。と。人。を。拂。ひ。何。更。小。や。と。問。な。れ。其。者。声。を。低



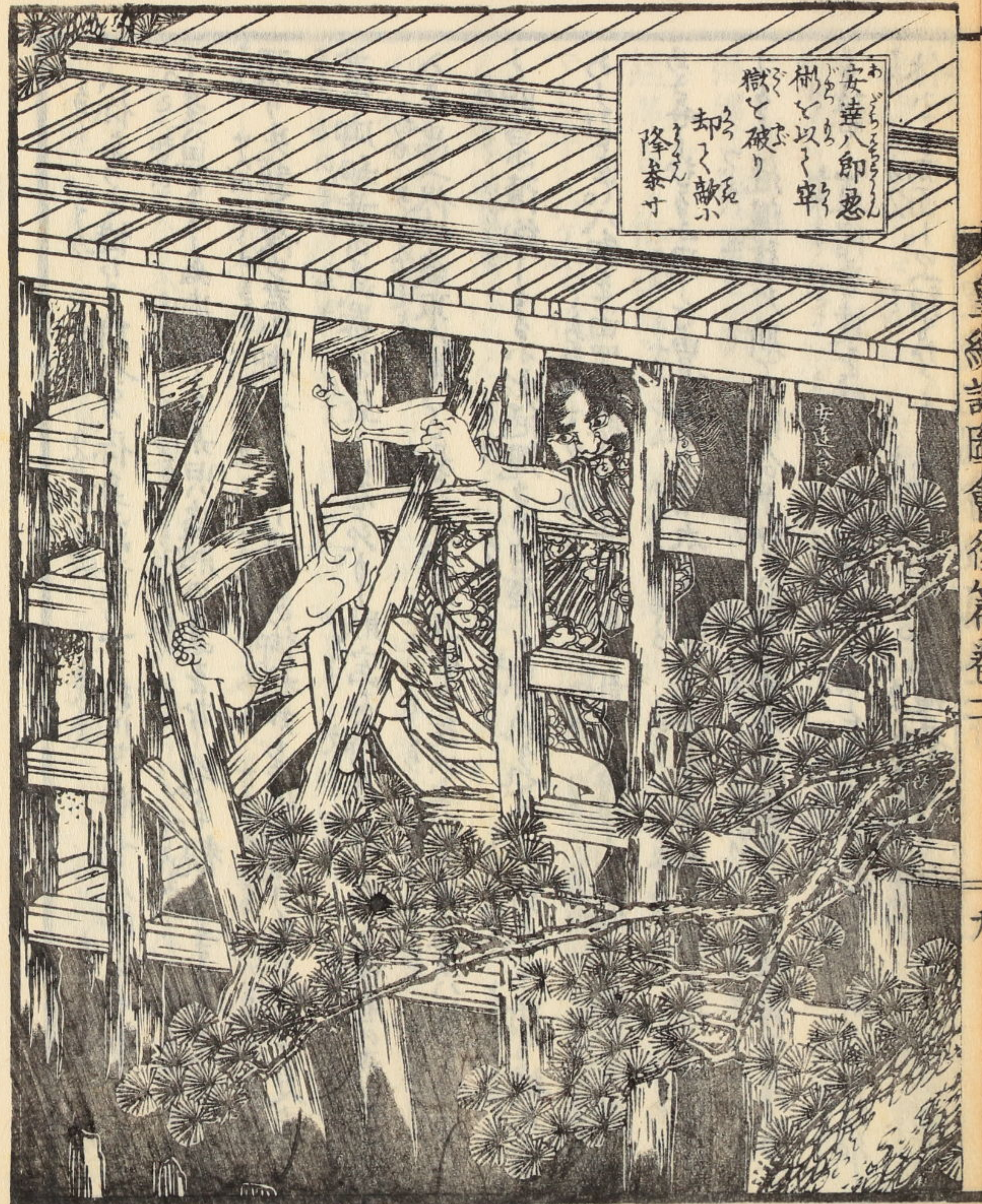
先達て紛失のせり。脚太刀甲冑亦々安達八郎が次血取ていかり。此義我より外お  
 知者なり。子細有て辨人仕るなりと言々るふ。源吾彦は先其者之。置置急死  
 縄の前へ出て右辨人の言へ趣を松へん。急死其者之。呼寄よとて召出  
 縄自り辨人向ひ。何者乎。八郎が武器を盗とり。や。其證據あり。あり  
 やと尋られ。彼者答て。小吏の安達八郎が千の者。小彼八郎脚内人。召抱へ  
 られ。表の忠実の体。小見せし。内。尚以前の賊情。止と。且強酒美食と好む。へ  
 脚扶知方。小雑費。足と。忍術を以て。武庫へ竊入。太刀武器。亦々盗取。敵  
 方の者。小賣渡。小と。小吏。小見届。小と。中々。縄繩。小思。小斯。小造。小中  
 上。小と。先辨人。小物。小忍。小せ。小安達。小方。小使。小軍。小敷。小就。小急。小高。小儀。小と  
 小吏。小只。小今。小来。小る。小と。言。小せ。小れ。小八郎。小承。小り。小と。即。小射。小使。小者。小と。日。小道。小大  
 將。小の。小陣。小と。赤。小リ。小る。小縄。小安。小達。小向。小ひ。小武。小庫。小忍。小入。小秘。小藏。小の。小太。小刀。小甲。小冑。小と。盗。小取

八你ありと慥なる辨人あり。你身小覺あり。と。小問。小せ。小れ。小八郎。小少。小も。小動。小る。小色。小  
 小是。小思。小も。小ぬ。小脚。小旋。小ぬ。小某。小只。小盜。小賊。小の。小業。小を。小な。小い。小ぬ。小觀。小音。小寺。小の。小長。小老。小の。小教。小化。小  
 預り。小先。小非。小と。改。小め。小君。小小。小脚。小奉。小公。小と。過。小の。小御。小扶。小知。小を。小頂。小戴。小仕。小り。小ぬ。小何。小の。小不。小足。小有。小て。小  
 君の。小脚。小秘。小藏。小の。小武器。小を。小盗。小む。小ぬ。小賊。小宝。小を。小得。小ぬ。小と。欲。小い。小富。小有。小の。小民。小家。小忍。小  
 入。小と。思。小入。小小。小盜。小取。小人。小更。小いと。易。小く。小ぬ。小一。小且。小非。小を。小改。小ぬ。小上。小六。小偷。小盜。小の。小業。小ハ。小敢。小て。小仕。小す。小  
 と。明。小泉。小陳。小謝。小と。る。小小。小と。縄。小も。小有。小と。思。小れ。小れ。小彼。小辨。小人。小が。小所。小も。小據。小あり。小  
 あ。小と。と。八。小郎。小を。小置。小置。小數。小の。小武。小士。小と。八。小郎。小が。小部。小家。小遣。小す。小。小物。小も。小必。小と。搜。小檢  
 め。小と。小む。小小。小果。小と。思。小と。尋。小太。小刀。小の。小袋。小に。小有。小る。小由。小即。小ち。小取。小て。小と。縄。小小。小呈  
 小と。小縄。小發。小れ。小斯。小と。辨。小人。小の。小如。小八。小郎。小が。小盜。小取。小疑。小な。小と。帷。小幕。小の。小蓋。小小。小力。小士  
 を。小隠。小置。小宿。小安。小達。小を。小呼。小出。小右。小の。小燈。小迹。小を。小出。小と。結。小向。小せ。小れ。小八。小郎。小大。小小。小疑。小れ。小  
 体。小赤。小面。小と。小免。小首。小と。小と。小繩。小扇。小を。小投。小と。相。小圖。小を。小わ。小る。小小。小幕。小乃





皇統己酉會後三男



安達八郎忠  
樹を以て  
獄と破り  
却て敵  
降参す

皇統己酉會後三男

九



後より十余人の力士顯を出八郎を捕て仕高平の縛りたる。縄繩怒り八郎を喘と  
 睨とやれ八郎你先非を改めしを以て予が家人小呂抱いし功もあれ小過  
 免の扶知を与へし其思義も不顧予が重器を偷取て賊軍の手へ賣渡し割  
 ち横手と翻して予を欺んたる余言語道断の曲者なり。今此證状を見ても尚  
 陳謝の詞ありやと罵り有合口杖を把て面部肩背の分ちたかく力任せと散り  
 撃たれを怒り小鬚質の上列表て鮮血逆り流まらる。縄繩尚も勃怒止む。渠奴今  
 殊戮とせられぬ。近日賊徒征討の出陣とせられ其時軍神の血糸小首と刻下  
 此迄を獄屋へ繋ぎ置厳く番と付て守りしと命せられ力士命を領し  
 安達を曳きて牢獄へ入れ西人の番と付て守りし安達八郎八元未忍術と  
 熟練し其夜且満頃幻術を行ひ番卒と悉く眠らせ牢を押破り跡  
 暗く逃失く。夜明て番卒ども眼を覚獄中をえられ格子破り八郎八早

抜出と覺く影も見えぬを大少該大將(斯と辨れ)を縄繩大少怒り疾小  
 も殊戮とせられぬ。奴を平延小して逃失させど安達八郎此上八元未忍術を搦捕て  
 未だよとて武士數人遣し早老母も逃退て行方知るも手と空りて弛  
 くの其由言上りる。縄繩信怒り安達八郎を生捕り又を討取て首と出す者  
 小八重く賞金を与ふ。高札小記と所小を嚴く其所在を穿鑿せられ  
 却説安達八郎の獄屋へ破抜出。其夜老母と將て退母を知音の者小  
 預けせられ伊治世を景押へり對面を乞て曰某八安達八郎と呼者者小  
 小が子細有て京方の大將縄繩が招た小應。新小其麾下小屬しとら。此頃武  
 庫の太刀甲冑亦紛失せと後者のみうけられ。縄繩不明して理不尽小某が盜取  
 小定め。脚賢の如く面上小涙分肩とてお摺。已小獄小下し斬罪せんとせを  
 忍術を以て牢と抜出。縄繩を討く無念を暗きと思ひはも障有て本意と



遂ど所詮自力にて討つるを御手加かり近日京軍の押寄いんを脱し  
 継繩を討討憤を散し推忝しゆかり是れ度々の御招れ小應せざる  
 罪を御赦免有て歩軍の末加むるを大馬の勞と賜し忠戦を励むるに  
 と訂を申て頼とを此宮ハ行腕と頼し金窪兵太失痕のふ小死亡  
 膽沢悪太郎ハ此頃瘡疾小引を竜々ある力とある勇士もがと思上折  
 しも多羊狼心望せ安達ハ即自身幕下小属せんと望多も大悦び一議小  
 も及ぶ降を容し酒宴と催して重く管侍し諸京軍の強弱を問ふに安達  
 答て京軍ハ昨幸阿隈川原の二戦も負多兵を折る御勢の武勇小怖を  
 再び戦ふ義勢かり其上長陣小退屈し只帰京せん更をり思ひて戰場向ん  
 更と望む者十が二もなくは然とも當年都より加勢とて藤原小黒上呂三千騎  
 を將り弛加りゆむ近一軍せん押寄いんを然とも大将ハ皆公家長袖小く

兵学ハ机の上より閑せの戰場の場敷を踏もあも軍勢とも並日思  
 顧の者ハ鮮く多ハ公の募小應し集勢もて命と抛ち敵小向んとする程の  
 士卒ハ稀小いまるも地理を知らず奇兵を以て是を伐ん小勝とて更有る  
 こと弁舌淀とやく鋭多を此上呂深く脱び再難得と思ひ當座の引出物と  
 と太刀甲冑引馬ホと与し是より軍議の行相干し萬更安達と高議しとど  
 かり小多官軍の大將経繩小黒九賊徒征伐の軍議と定め今度ハ大手搦手  
 両方より攻立一本小搦破んと大手ハ大伴益立と先陣と小黒九後陣とわり物  
 勢五千余騎搦手ハ紀古佐美と先陣と経繩後陣とかり物勢五千余  
 騎天應元年九月十二日未明より玉造城を攻立此上呂搦手押寄多此上呂  
 と疾より京軍の軍と知れし二千五百余人を大手搦手小多大手の防ハ大將此上  
 呂栗原源三千三百余人にて固り搦手安達ハ即松前荒野一千二百余人あく



守りたり。素り切所の山上小構、柵して左右、老樹蔚茂くと、孤兒も強り、大車  
 柵手小槽高く建、大木大石を積貯して、旗の竿と風小靡、究竟の射入、鏃  
 を揃へ、敵寄来らざる、微塵小せん、待りけり。去裡小官軍、大車柵手、各小金鼓  
 を鳴り、喊を發、曳く声、攻登る。先大車、坂手より、大伴益立、先、五百人  
 持楯を被た連て、柵際迫り、攻寄る。小賊軍も、罅を發、矢を射下し、更雨の如  
 く、大木大石を釣瓶かけ、投落し、れも、寄手、是、小辟易し、人類、引退く時  
 小柵門と、間、栗原源三、三百騎を率と、撃て、出、噓と、喚、下る  
 小。大伴が勢、折、崩れて、坂下、と、逃下り、多、賊兵、去、敵、伐、惱、手、注  
 く、勢、引上、柵中、引入り、大伴、益立、大、怒り、小勢の敵、後、と、是、更  
 や右と、新兵、入、入、早、攻、登り、れ、賊軍、木石を、投下し、矢を、發、射下し  
 寄兵、痙、れ、伐、出、高、より、捲り、落し、る、更、京軍、兵、を、折、乃、と、何、乃

仕出たる、更も、攻、徳、く、え、え、り、り、多、諸、も、柵手、向、吉、佐、美、繼、繩、が  
 勢、も、五百、騎、七、百、騎、番、手、と、定め、喊、を、發、攻、寄、る、安、達、八、郎、前、の  
 若、龍、木、石、を、投、矢、と、射、下、て、敵、防、ぐ、更、大、車、と、等、く、寄、兵、疲、れ、を、伐、出  
 く、逃、落、敵、退、け、長、追、せ、柵、引、り、城、門、を、固、て、守、り、る、更、此、手、も、京、軍  
 手、負、死、亡、の、者、乃、多、く、敢、て、攻、入、更、能、く、猶、豫、て、在、る、亦、甲、剋、過、る、頃  
 忽、ち、此、日、も、柵、の内、小、黒、煙、り、蝸、巻、上、り、火、の、午、起、り、柵、中、小、騷、動、乃、声、大  
 小、ゆ、え、々、る、亦、柵、手、の、大、將、經、繩、大、音、亦、須、波、攻、入、と、下、知、れ、一、千、五、百、騎、の  
 寄、兵、一、百、小、喊、を、發、攻、登、小、賊、兵、防、ん、も、せ、と、却、り、城、門、を、開、た、る、更、  
 官、軍、朝、の、涌、如、く、攻、込、る。賊、軍、ハ、俄、の、出、火、亦、發、防、だ、消、入、と、騷、内、亦、早  
 敵、勢、攻、入、を、信、強、死、惜、へ、及、忠、の、者、有、て、敵、を、引、入、る、と、強、立、周、障、薄、倒  
 して、敵、と、防、ん、と、る、者、乃、煙、亦、喊、火、亦、燵、て、狼、狽、感、と、京、軍、撫、切、小、切、て



回る更草と薙ぐ如く大手の寄兵益立小黒丸も敵柵の火の手成んで敵方  
内変あるを察し一はぐ千五百騎を進む攻登り城門を歩破て大浪のどく  
込入るるえ来此日の及忠八別人あごと安達八郎が及間の謀計を継繩と示合  
一賊情の更を以て継繩の咎を受牢獄を技出て此六呂小降参り。時  
分小陣小屋火をけ寄兵を引入ると京軍とつるも余人更不知り多  
程小賊兵も前後より攻入敵途を失ひ素り欲心の為小味せ野武士  
山賊原かれと我我知耻を知る者二人もた途を奪て逃んとて付れ或  
ハ半々束て降参するも有又も生捕るも多幸と柵と逃下し者も小屯  
せ一官軍小鈍くと擒ふせれ。賊將此六呂味方の内変と入る大不怒  
大太刀技掃し馬と跳して群る京軍と縦横無尽小斬て回り敵と斬更敷を  
あつて果大太刀も刀も半折大手と廣げく近付者と搔扱て人礫小赤丸小

あれ悪戦一多る己小馬も射とくめれて斃れを蹴立小なり猶も敵中と  
近回りと士卒と歩悩し其身も矢痴太刀痴敷妻受合ハ是中てなりと鏝と  
解て腹十文字小搔切ると安達八郎近来て終小首とど揚小多る此余  
栗原源三松前荒鰐以下の宗徒の者も乱軍の中小戦死。此六呂妻妻女  
童ハ火中投し又も刃の下小余と落し士卒亦も或付り或ハ虜となり手小  
立敵一介もやなりを緒繫小火を防消せ勝城を揚射とく首と懸檢  
まると千二百余級小及虜九百十余人焼死の者ハ數多とく。去年、を  
官軍と悩し威を國中小奮し此六呂も運々われを戦場の露と消堅固小  
構し要害も一時の煙と成ると哀なり。是偏小継繩の智謀と安達  
が働小依とともなり斯く兇敵亡びる。バ継繩小黒丸軍卒と分て所小逃隠  
一残黨を搜し出して搦捕せ罪の輕重小依て死刑より追放し賊將此六



呂が股肱と頼り、膽次、悪太郎も搦捕て首を刎、宗徒の首の首と、梟木も  
くけ一國平定せり。十月、上旬、征東使の面々、諸軍を率て都へ凱陣せり。

東征使凱陣賞罰 不破内親王母子流罪條

征東大使、藤原繼繩、日、藤原小黒丸、其餘の諸將、路次、障なく、歸京して  
參内、賊徒を伐亡し、奥州平均せ、越後を委用し、これを桓武天皇、大、勲  
感在り、繼繩、小、黒丸、古、佐、美、亦、小、忠、賞を賜り、安達八郎、亦、奥州の中、  
菜地を給り、今、度、忠、戦の功を賞し、獨、大、伴、益、三、軍、戦の期を愆りて  
寸功かたを処さず、其、官位を削り、其、多、士、程、亦、奥州の國乱平定し、  
人心を安んじ、其、又、都、不、時、の珍、更、出来、延、曆、元、年、壬、戌、國、正、月、  
因、幡、守、氷、上、川、繼、隱、謀を企、其、義、露、顯し、召、捕、きて、遠、嶋、へ、隔、せ、れ、り、  
其、首、級を尋、る、氷、上、川、繼、と、天、武、帝、の、曾、孫、小、當、也、天、武、帝、の、皇

子、小、新、田、部、皇、子、と、中、あり、其、脚、子、と、塩、燒、皇、子、と、中、せ、が、去、ぬ、る、天、平、宝、字、八  
年、惠、美、押、勝、謀、叛、と、塩、燒、皇、子、を取、て、新、帝、と、冊、後、攝、と、なり、軍  
勢を驅、催し、これ、も、遂、亦、合、戦、亦、負、押、勝、討、と、なる、由、へ、塩、燒、皇、子、も、連  
累の罪、お、誅、せ、れ、り、其、初、り、塩、燒、皇、子、の、庶、中、ハ、稱、德、帝、の、脚、妹、お、て、不  
破、内、親、王、と、中、其、脚、腹、亦、出、生、せ、り、即、ち、川、繼、なり、其、節、ハ、い、づ、幼、稚、と、い、母、を  
天皇の脚、妹、お、れ、母、子、と、も、罪、科、の、脚、沙、汰、也、都、と、退、去、と、在、る、小、川、繼  
漸、成長し、其、母、と、心、を、合、内、謀、叛、を、企、神、社、佛、閣、へ、暗、小、稱、德、帝、と、見  
咀、する、願、文、を、収、り、朝、表、を、乱、さん、と、せ、り、其、隱、謀、露、顯、母、公、を、押、蓋、ら、れ  
川、繼、ハ、土、佐、國、へ、流、され、り、亦、小、川、繼、身、の、非、義、を、改、ん、と、せ、と、本、意、と、達、せ  
ざる、成、無、念、小、思、ひ、お、れ、た、時、節、も、か、と、待、々、亦、光、仁、天、皇、年、号、改、元、小、就  
く、天、下、亦、大、赦、と、行、ひ、め、り、時、川、繼、も、流、罪、息、免、あ、る、都、へ、召、還、され、り、



継君息之志とも思ふに猶も帝と傾けもろ己王位と踐んとおぼらげありぬ  
 大望を企酒宴遊興小托せし月御雲客を我邸舎招た其心腹と試と  
 一味荷擔させ兼て召抱し家人小大和乙人として無双忍術の名人あり其者を  
 内裡へ潜入せ軍勢とくひて不意小宮門へ押寄ると其喊声を相圖小内より御  
 門を開くせんとて入込せり。乙人忍術の達人なれば。二三日以前より太刀を帯  
 び。さきも衛護嚴し禁閑へ潜入する見処る者もあらず。仕とありたり  
 と独咲し。回廊の蔭小身と潜りて相圖を待々す。天の君を謀りしもんとす  
 天野小や頻小咲嗽出する也。強て咲を抑止んとせしも。咲止しと堪るも  
 我あもど敷声咲嗽するも。禁中夜回りの衛士是を覺れ。只今の咲嗽ハ正  
 しく廊下の辺小見えり。此辺小人の居るを覺れ。かたて。松明を揮立て其辺  
 尋搜し。果て廊下の下の隅小怪た人影見え。須波や曲者こと

あれとて。夜回りの武士們曳出と搦捕んと年料たぐる。乙人今ハ逃まぬと心をも  
 定め帯る太刀拔持て挑り出先小する武士と啗と斬何六以て堪るを死。真  
 向より切割きて唾と倒れ伏するも。是ハ狼藉かりと残る武士も亦拔連  
 て切ぐる。乙人死物狂と働れ。又人を切仆し。二小手と負せり。されども己も  
 二テ所手と負て踵く。と。大勢前後より取圍と太刀と擧落し。兩脚を羅什  
 しており重り。遂小高手小傳り上右司の廳所へ曳行有し。始末と松へ右司  
 強丸即刺踏向小及び。小姑の程ハ左右言終し。白状せり。度々の呵  
 責の苦痛小堪る。て。上某城ハ氷上川。継殿小奉公する者おて。川。継殿  
 當今と傾けもろ。謀殺を思ふ。明十日の夜一味合鉢の人々と。勢勢小て脚  
 所の北門より襲ひ入人の手筆おて。其ハ忍術小達し。心をも兼て。脚所中へ潜ひ入  
 相圖次第小脚門を内より開けよ。下知小從ひ。僧入り。廊下の下小隠れ居り。



と巧の次第残らむと白状おと及々是れ小依て有司具状を以て右の二件成奏し  
 らむ。桓武帝甚く逆鱗在り先急小四方の禁門を固まらせ。防禦の備を嚴重  
 におなせし。備何気かた休て官使を川継の方へ遣し。俄小評議を乞ひ  
 更あれを疾く参内せし。言し。今川継ハ御使の来り。かた何となく心騒  
 ら。是れ必定し人か更を仕損。密謀露頭せし。成命と早く推察し。官使  
 を領掌せし。首と言て返し。母公と俱おとる物も採あむ。後門より落行人と  
 る小兼て朝廷より。自然川継が逃失んとする更も。其石所の四方ハ大勢の  
 官兵と伏せられ。川継母子遂に鈍くと虜となり。有司の廳へ。曳進せし。  
 禁廷ふし人を跨。向て荷擔の輩と遂に白状させ。其討ふ付て宇治王と先  
 と公家武家も。川継お合躰せし。輩と悉く召捕せし。帝群臣と召集し  
 勅詔し。川継義先年隠謀と企更發覺して流刑お行れし。と

先帝格別の仁恕を以て大赦を行ひ。川継母子が罪を赦して召還し。む  
 いふ。其天恩を忘却し。今般も隠謀を企朕お冠せんとせし。余重くの罪科  
 せし。急度殿科お行ふ。死罪者も先帝前御在り。陵の土乾す  
 朕も哀戚不堪と。縁圖し。折られ。死刑の沙汰を。おなせし。依て川  
 継が死罪一等と。省り伊豆國へ流罪小處と。其母不破内親王六女の身。て  
 一度おと二度ま。川継お逆意と。勸り。余是より重罪を。死刑お行ふ  
 ら。川継が死罪を。省る上。其母も死刑と。免れ。川継が姉妹と。も小  
 淡路國へ配流し。其餘川継が隠謀。荷擔せし者も。罪の狂重。因て配所  
 の遠近を。定め流罪小處と。宣ひ。免れ。諸臣下領掌し。川継  
 母子が二度の大罪重く。刑罰ある。川継母子も。死罪と。省り。更更實有。死  
 脚仁政。感嘆し。川継を。首と。一味の輩と。皆を。小流刑。お行ひ。彼し人ハ



衛士三人を殺害し、其余の者も手と肩を削り、これをとて首を刎られ、嘔吐を  
うへ川継母子、聖王の御仁息をも願を再度及むる企てたり。數月心を場  
せし、急謀一時、小露顯し、再び配所の二卒となり、遂に死亡して汚名を万  
代に遺せし、偏小天命、小逆死、明君と謀をもんせし、冥罰を知らざる  
宇佐八幡宮、詭宣弑神傳、蝦蟇合戰、怪異之條

延暦三年夏五月、豊前國宇佐宮の社司皇都(上)り、糸内と奏用し、  
小、先頃八幡宮の御神純小我一切衆生の苦を救樂と与人と欲を、今、  
我名を八幡大自在王菩薩と稱を、と宣ひ、依て願く、八幡純宣の趣を  
勅許なり、給り、仰れ、願ひをいとて、奏状を擧、多むおと帝、敷聞、  
おひ公卿百官と、はれ、御評議の上、則ち勅免たり、のひ、是、小因て、社司、  
帝恩を拜謝し、も、豊前(下)り、是、より八幡武大神を、改め、八幡大菩薩

と稱し、も、更と、八幡宮と、や、も、八皇十六代の帝、應神天皇乃、御  
更かり、則ち仲哀天皇弟四の皇子と、御母八神功白皇后、在せり、白后皇子  
を、孕り、ひ、ま、三韓を、御征伐あり、御凱陣の後、庚辰の冬、十二月、筑紫乃  
岐田、わ、平易と、自皇子と、産せり、其、生、ま、せ、り、初、り、御腕の上、完生、り、形  
靴の、で、く、た、り、也、言、田、天、皇、も、や、ま、り、た、り、是、即、ち、應、神、天、皇、と、在、せ、り、御、治、  
世、十、一、年、宮、室、并、百、十、才、小、く、庚、午、年、二、月、十、日、大、和、國、涇、島、豊、明、宮、と、崩、御、  
わ、り、の、河、内、國、古、市、郡、長、野、山、小、葺、り、も、其、後、八、皇、三、十、代、欽、明、天、皇、の、御、宇、  
小、初、く、御、廟、を、ま、さ、り、今、の、河、内、國、言、田、八、幡、宮、是、なり、欽、明、天、皇、三、十、一、年、の、冬、豊、  
前、國、菱、形、の、池、の、辺、に、民、家、の、小、兒、ふ、り、ま、り、と、神、純、あ、り、た、り、我、は、是、八、皇、十、才、  
言、田、八、幡、九、た、り、普、く、緒、國、小、垂、跡、に、今、ま、此、地、小、住、を、た、り、と、あり、是、小、依、り、  
右、の、首、と、都、(奏、聞、)及、ひ、を、即、ち、勅、使、を、ま、ら、れ、豊、前、國、小、八、幡、宮、の、宮、社、を、建、



宇佐八幡宮是也。又其頃筑前國那珂郡管崎小白幡四流赤幡四流天  
 下降り土地の童女小神純ありて我八幡丸なり此地小鎮座を命りとあり  
 由へ其地小松を植へ宮殿を造るる管崎の八幡宮是なり。又山城國男山岩清  
 水八幡宮八皇五十六代清和天皇の御宇奈良大女寺の僧行教より俗姓ハ  
 紀氏小く武内宿禰の後胤ありて常小八幡宮を信仰しより貞觀元年小豊  
 前の宇佐八幡宮小松筆一夏九十日昼六乗経を續補一夜八夜出兒と唱誦  
 して心小渴仰しより一夜の夢小八幡大神告て宣り我和僧の法絶て入  
 受れを師小別る小思びを師都へ皈れ我も都へ上り帝都の側小鎮座皇在  
 を守る命り正示現しより入て夢覺より行教感涙小堪む願て押の  
 枝小脚影を移し清淨の如表小衆と頸ありけり都へ上りより小城川中崎の宿小  
 中より夜の夢小八幡宮現るより師我鎮座する地を見よと神勅と蒙り

とひとく夢覺より行教奇異の思を中宿と立出て四方を臨み乃小東の方男山  
 鳩峰小ありて光輝燦然と貫見と照りたる小と行教信心肝小銘し其曙光と  
 目當りて尋到りる小実小勝する靈地なり余りの難有ま二度の神純を  
 紀錄し表と上りて朝廷奏しより帝御感涙ありて即ち木工寮推毛福良基  
 小紹命ありて豊前宇佐の宮式小准し鳩峰小新小宮殿を造りしめりハ  
 幡宮の神靈を遷しより本朝第二の勢宮宗廟と仰たれ源氏の氏神と  
 崇りて是清和天皇八源家の祖なる也なり。并ありてハ弓矢の幸神あり在  
 せり。されむより分て武夫の武威と祈る小感應ありて小妻なり。緘小尊りし  
 脚妻なり。是ハ且也。茲小奇姫の一妻有る。延暦三年五月上旬檉洲天王寺  
 の寺内小五月七日の東雲の頃西南の葦より長四五寸許なる蝦蟇数千とも  
 ありて這出段り小列り天王寺の境内へ入る。其蝦蟇の色黒く班小て中む。



巨魁とちがへば色赤く篆書の如き紋あつて肥大なり。諸漸く小數多く出来  
 リて幾万といふ數をもちむ始はるる人も無りたる小三人五人と寄聚り果は若  
 男女群集して是と見物し百般説をまきふむむる内小又東南の叢より  
 いく無數の蝦蟇追く出来りて境内小入東西小く列をまきまき  
 陣を張屯とちがへば異あつて凡二三丁の向東西の蝦蟇六七万小元満り。斯て  
 緒人目も離さむと見物するも小東西の蝦蟇聲を揚て飛寄く入りて咬  
 合程小あつて半脚を咬むと血小流弱り果て這まも叶はざる他の蝦蟇来り  
 て背小負蓋入りあり。おのひ其場小て嗜殺するも有互小咬合ても小死す  
 るもあつて一向軍兵の血戦する小一般なり。緒人始は世小珍なり。其小あひてお  
 入るも後小入る目も痛く袖を覆て見得ざるも去程小東  
 西の蝦蟇の咬合て二時むり小と漸く小別を引退た果は一足も残らむと無

かりたり衆人不思議の更小あひ末代はあつて前代いすまきる珍更小所  
 ことまじ小佛法最初の道場現世の極樂浄土と唱る御寺小く奇怪  
 ある更何さる兵乱あつて幾も前表小やとつり小評論。おのち翌日小蝦  
 蟇の圃ひやあると。史傳する徒早朝より天王寺へ群聚する更前日小十倍  
 終日待暮せむ。其後ハ蝦蟇一足も出来らむ。其辺の叢と搜し尋ねれむ  
 蛙一足も居ざりむと不測とりの由疎かりける

山城國長岡都經營 早良親王謫罪憤死條

桓武天皇平城の都と山背國小迂らむり。思召中納言藤原小黒丸從三  
 位藤原種継兩人小命せむ。帝城とちがへば良地を擇ませむ。兩卿勅命  
 を奉り山背國へ起東西南北を巡見らむ。小訓郡長岡の地と他所  
 小勝れむ。此所と皇都とちがへば小最上あるとて。地圖を寫して取



帝の睿覽小備られんを君脚覽ありて睿慮小合ひ急だ其地小宮闕を  
 經營とをとと勅詔下りる小す西脚より木頭修理職ハ渡一六月中旬  
 より五幾七道の入夫を召聚め土を運び石を曳良技緒物と集て日夜を  
 分とと修理を励と造営と急だる程小冬十月小及び早くも宮闕殿宇成  
 就一も其由奏聞一も帝睿慮一参議近衛中將紀船守と勅  
 使一と山背國賀茂上下の神社一常と奉り遷都の義を明神小告一せり  
 是賀茂の神社一山背國鎮護の神一故と名斯と奉幣相と一れは幸  
 十月最上吉旦と擇と桓武天皇女御后妃緒親王公卿百官と將て平城の都と  
 脚一賀茂馬在一長岡の新都一臨幸一の遷都の規式を執行一せり  
 小依て百司百官と一と一士農工商も大半平城より新都一居を移一り  
 忽ち不時の強動起り一其乱根を尋る小今度新都の地形を見立一る中

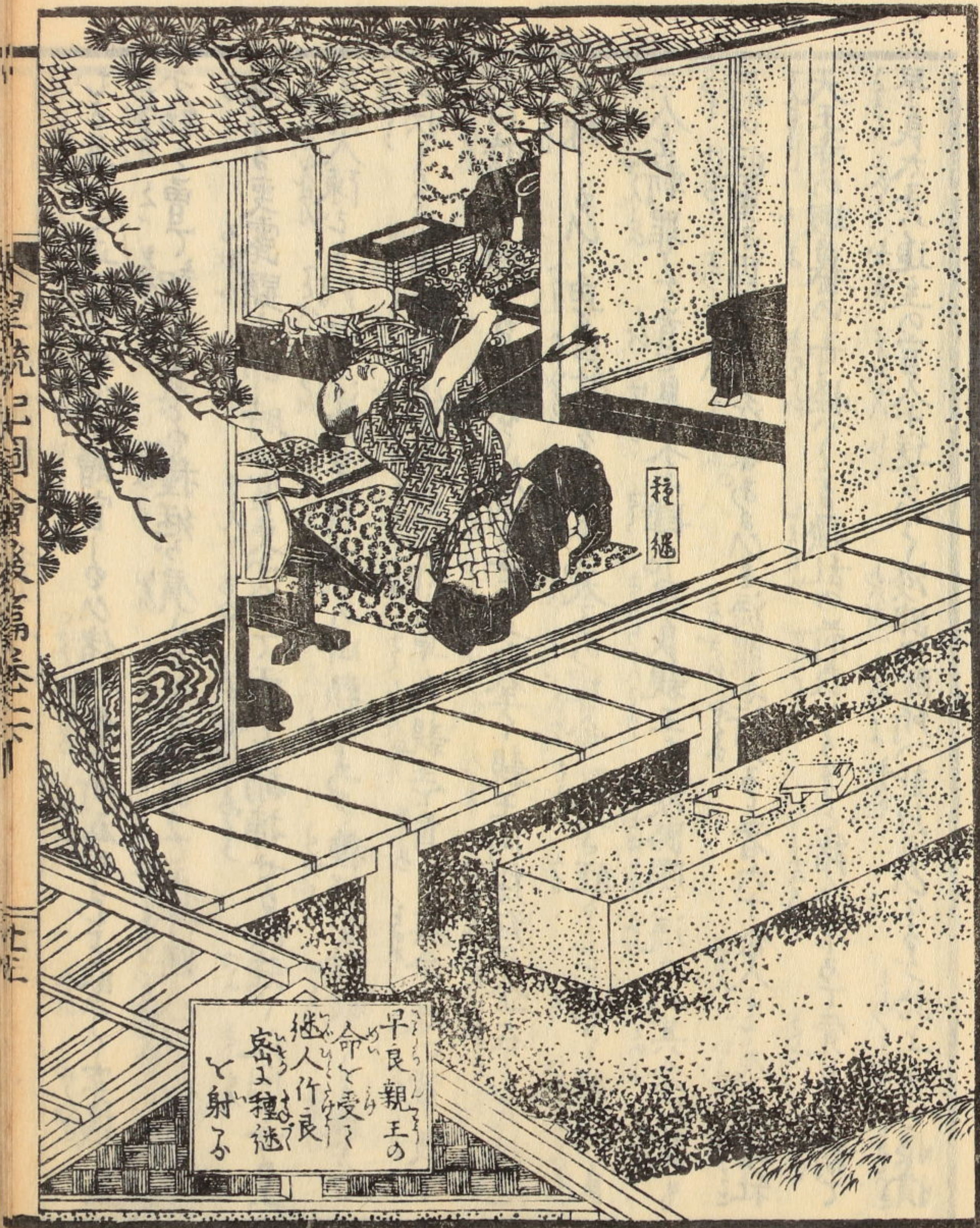
納言種継と一る前左大臣良継の嫡男正三位宇合の孫一て系圖と一の家柄  
 と一君の脚覽他小越一芽出と權勢肩を並る人一も一帝一常小  
 遊獵を好一せり朝廷の政勢ハ多一く皇太子早良親王小委一ひ一る也ども  
 種継ハ帝の電臣一あれ平日君ハ昵近一り内外の政吏と執奏一威勢猶早  
 良太子小踰一れ早良親王甚一心小種継を忌一ひ彼が君電小矯り我意の  
 行条一を嫉一憤り一隙もあを種継と追退一る時と窺ひ一ひ  
 小其頃佐伯入一毛人一と一者親王小阿一理一脚意小一り入一れ親王も今毛令  
 月朗肩小思召彼を参議一の官小任一せん其由と帝一奏一り一ひ一る小種継是を  
 遮り抑一佐伯氏ハ参議小昇進一を一家柄一あ一む此義ハ勅行一り一る  
 ごとと奏一り一る帝も一の義小思召一れ入一毛人参議小昇進一の義一を一る  
 上日親王一勅詔一り一ひ一る是小依て親王の思召一齟齬本意と失一ひ一る是皆



種継が中坊と云ふところなりとて御悪し益強く如何もと種継を追退んと入を以て種く統と云ふ悪き多小奏聞させしれども帝更小信用しむを刺入是より朝政を太子小任せむと種継と商議しめて萬機の政更と定めりふと親王の御勢ひ追く薄らぐ種継が権勢ハ日小増長し親王の御無念小思召且々憤怒のわの心焦しめて延暦四年八月桓武天皇奈良の御都御幸なり之妻有るを早良親王是を究竟の時節とて棄てり意乃公卿大伴種人大伴竹良二人を密に招た此時を過さむ種継を討て捨せしめり二人仰を承りて弓矢を携へ種継の邸舎へ暗小潜入る其頃と遷都の砌小公卿の家造も皆いざ同疎かりて二人裏の堀を乘踰て易くと忍び入陰小種継が居間へ忍び行窺ひしれ種継は小刺客の忍び入りとハ勢小あはれ燈の下小書と開たり熱見て居るも仕るもたす種継人竹良と云ふ

矢うち番て口時小切て放りたる小過と種継の咽論と胸の正中とひく射串りたる二所も急所の手ある何と堪ぬ苦と一声叫び一休あり免首小倒ま伏するも二人も心悦び逸足小逃退去り種継が妻ハ斯ともあはれ何妻小や人の叫び声のまを怪し行てる小夫種継ハ急所ハ二筋の矢を射付られ免首小伏居りたる小是ハいふと大い殺れ急小家内の男女を呼集り先夫を扶け起し矢を抜捨て抱りたる大妻の手あると言句と幾と更も能くど其夜の曉頃小終小成りたる幸齡四十九才かりたる妻子親族寄集りて悲敷と更限かり何かる悪黨の所為かりとと穿縫とれも更小敵を知ぬ便もかり先帝奏せむと有るも平城へ急馬を走り種継の横死せし趣を奏しれ帝大い殺れ急小密奏と長岡の新都へ還りし電臣の種継たれ御哀悼の勅使を遣されせり亡魂を慰





早良親王の  
 命を授け  
 継人作良  
 密に種継  
 と射子



皇朝詩話會後篇卷二

九三



むる為やく正一位左大臣の贈官のひ儲何者の所為なるごとく緊く穿綴し  
 小幼と曾て知ざりしれども種継が肩する矢お燈ありて大伴継人同く竹良所  
 為かる更露頭一即時に官吏を命て兩人を搦捕せし強く引回させし  
 小兩人陳ざる約なく遂に早良太子の御頼よつて種継を射殺し趣きと  
 白状しなり帝甚く逆鱗在り即ち早良親王と首く其余一味の輩數十  
 人日時お召捕せしひ悉く引回させしお全く親王御謀叛の企在り先種継  
 を誅しひ一申と白状しるも太子の罪命甚く狂くを因り種人竹良  
 二人を斬罪しと首と梟木お肆し早良親王を淡路國に流され其余の輩も  
 罪の狂重お因り或は死罪ありしを流罪お行はる者六十命人お及る諸社  
 天王寺の蝦蟇の奇怪はる強乱の前表なりと諸人おめて覺りし斯て  
 早良太子追々の官人お送られ淡路の配所へ赴れしひるる路上帝と恨憤

怒りの食更を断り淡路に送りぬ途中小て飢死しひるる王法おれ  
 其脚屍を淡路に送り葬り進させしひるる然る小太子の悪霊の所為  
 都小種々の怪異あり緒人其れお覺れありし病者ありし死亡する  
 者夥しく其れお皆早良太子の悪霊の力をとる言觸り上下お感  
 都鄙の軀歌喧しりるれお帝は是を患ひし緒寺の僧綱お紹り成下し  
 太子の悪霊を鎮めさせしれども更お其驗なく倍奇怪の更のともなる  
 斯る年月推移り延暦六年の冬より雨降ど翌七年の五月迫り猶雨一滴  
 も降ざれば川水枯池溝も水竭り農民耕作する更と得む斯て八百軒枯  
 果五穀を植ふ死便なりとて万民の歎け大方ありし米麦大豆粟の價追々  
 高價なり世の困窮言んたり是れ早良太子の悪霊の祟ありと云合  
 々り帝再び睿慮を悩しひ五畿内の垂並佛並社へ宣命と下され雨乃祈



を修せりやも敢て功たつ弥雨降む田畑も小乾た割生民渴魚の轍乃水  
 小息つて帝深く歎く群臣と召れ勅詔かりし中昔殷の湯王  
 の代小七年間年毎小早して五穀登る吏が天下飢饉小困と餓死する者多  
 かりん湯王是を歎れ自ら粟林の野外小祈を積で其中小車と五六ツ  
 罪を乞ふ身小して天意小逆くともあむ朕身を牲小して雨を降く事小  
 た民を救ひよと祈り積る新小火をうけり天其誠心を感下り火  
 いふ新小煖くつる以前小忽ち大雨降て早魃の患と救ひよと我朝の古も  
 文武天皇彼湯王小あひ自身雨を祈て万民を救ひより天下早して生靈悩  
 り困む吏早良太子の丞靈のふと所なりと風説とれも恐るる朕が不徳を天  
 より責めよとちかす依て朕も文武帝の先蹤を追て雨を祈らんと思へ卿  
 等其儲をわせよと詔命ありん諸臣下君の御仁徳を感下り領事手して

急に禁中の庭上祈雨の靈壇を築れ注連を張四手以切り四方小四神の旗と  
 立其餘種々の供物を調用意全く備けり帝浄衣を著れ冠を正  
 して壇上登りの上天を拜丹絨を凝して雨を祈り壇下の庭小三公九  
 卿もも諸卿百官列座して小天を拜して雨を祈る小天感字一々半  
 日むら過るる密雲東西より起り天須臾のち小曇り一陣の風吹  
 来り雨の膏雨大降出と盆を傾るが如く帝龍顔麗く天  
 恩を拜謝し小宮中還らせのち群臣も万歳を唱慶賀しむる退  
 出する斯て大雨降吏三日三夜小止むるが活る井泉も湧き竭  
 る河水も漲り流る諸國の乾地潤むと所ふれん万民踊り舞て大  
 悦び帝の聖徳を仰ぎ尊此君の御壽命百年も久れと祈る去程小  
 早魃の患止れん帝も臣下小勅し早良親王小崇道天皇と謚を



賜たまは一社いっしやの神かみ鎮ちぢ祭まつりより是こゝも御ご靈りやう八社はっしやの中なかの一社いっしやなり。親おや王みこの慈あはれ靈たまはも帝みかど恩おんの厚あつたを感あはれ。其その後のちハ怪けい異いの更さらも止とれ。諸しよ人にん漸しだ々々心こゝろを安やすん。是こゝ偏ひとへ小こ帝みかどの御ご恩おん沢たくなり。弥よ君きみ德とくを仰あがたり。朝あさ廷てい小こ帝みかど諸しよ臣しん下げと御ご評ひやう議ぎ有ある。春はる宮みやあふむ有ある。す。とて弟あに二にの皇みかど子こ宇う殿てん親おや王みこと皇みかど太子たいし小こ立たむ。評ひやう議ぎ有ある。春はる宮みやあふむ有ある。す。とて弟あに二にの皇みかど子こ宇う殿てん親おや王みこと皇みかど太子たいし小こ立たむ。

築つく再また新あらた都みやこ造つく營えい大おほ内うち表へ

叙しよ最も澄すみ罔む基もと延のび曆れき寺てら條ぢょう

桓つら武たけ天てん王わう平へい城じやうの都みやこと山やま背せい國こく長ちやう岡かう小こ移うつ一いつ遷せん都みやこなり。此こゝ地ちも高たか土つち地ち狭せまく不ふ便べんの更さら多おほく大おほ納なつ言ごん藤ふじ原はら繼ついで繩じゆん大おほ納なつ言ごん小こ黒くろ丸まる小こ詔みことり在あり。再また比ひ山やま背せい國こく小こ新あらた内うち裡りを造つく營えいを命めいじ。地ちを擇えらむ。西にし御ご勅しやく命めいと奉ほうり。諸しよ所しよを巡めぐ見み小こ日ひ國こく葛くわ野や郡ぐん宇う村むらと新あらた都みやことを命めいじ。最も勝かちの地ちあり。即すなはち地ち圖ずを字ありて。歸かへり。帝みかどの睿えい見けん小こ備びら。れ。帝みかど御ご覽らんあり。朕ちんも其その地ちを見みんと宣のたまひ公こう卿けい數すう人にんを將しやうる。葛くわ野や郡ぐん宇う田でん村むらへ御ご幸しやくて。き。朕ちんも其その地ちを見みんと宣のたまひ公こう卿けい數すう人にんを將しやうる。葛くわ野や郡ぐん宇う田でん村むらへ御ご幸しやくて。

一いつの地ち形けいを遍あまく巡めぐ覽らん在あり。睿えい感かんあり。宜よろしく城じやう小こ此こゝ地ちと帝みかど城じやうを經へ營えいとる。小こ最も勝かちの地ちなり。北きた衆しゆ山さん環わんり連つらり鐘かね靈りやう毓じゆく秀しゆ是こゝ地ち也なり。武ぶ乃なり象しやうかり左ひだり小こ鴨あひ川がはの清きよ流りやうあり。是こゝ則すなはち青せい龍りやうの象しやうあり。右みぎ小こ千せん本ほんの長ちやう道だうあり。是こゝ身み迺なりち白しろ虎この象しやうなり。南みなみ地ち勢せい廣ひろく濶ひろく。是こゝ則すなはち朱しゆ雀さくの象しやうなり。將しやう小こ四し神しん相しやう應えいの靈りやう地ちなり。日ひつ本ほん廣ひろく。是こゝ則すなはち此こゝ地ち小こ優あまる勝かち地ち有ある。實じつ小こ万まん代だい不ふ易えいの皇みかど都みやこと謂いふ。急いそに宮みや闕けつを造つく造つくよ。勅しやく詔みことわ。のひ。余あまと諸しよ臣しん下げ奉ほうる。帝みかどと還かへ御ごなり。後のち木き工くわう寮りやう修しゆ理り職しやく小こ造つく營えいの義ぎを命めいじ。帝みかど賀が茂しゆ明めい神しん奉ほう幣へい使しを命めいじ。新あらた都みやこ徑けい營えいの義ぎを神かみ小こ告つげす。斯こゝ乃なり年ねん六む月げつより工くわう匠しやう造つく營えいと勵むく宮みや殿てんを造つく造つくよ。其その体たい方ほう六む里り四し方ほう小こ十二じふに門もんを建たる。先まづ西にし南なん八はち殿てん富ふ門もん南なん東とう八はち美み福ふく門もん正せい北きた六む偉ゐ監けん門もん北きた西にし六む達たつ知ち門もん北きた東とう六む安あん嘉か門もん正せい西にし六む藻そう壁へき門もん西にし北きた六む談だん天てん門もん正せい東とう六む待たい賢けん門もん東とう北きた六む陽やう明めい門もん東とう南なん八はち都みやこ若じやく



門正南朱雀門南東八皇嘉門なり。去程小諸職人猪根と冬一徑管を急  
 ぐ程ふ十月ふ至る新内裡成就しを帝御喜悅斜あを博士小令て  
 吉日良辰とトせし。十二月二十日長岡の王宮と出のひ宇多村の新内裡へ  
 遷幸あり其儀式いと嚴重小伶人音楽を奏し百官敬言蹕の声豊豆  
 小萬歳を唱る声揚くと月卿雲客今日を曠と装ひて鳳輦小隨逐  
 君を入御なりもろろハ芽出度るも御更なり帝新都へ入御のひ小諸所を  
 睿覽在とふ殿閣門樓百工手と冬。善冬一美冬一諸司八省ふりて逆  
 莊嚴を極る小と殊更小御感在。卿相小詔命一もや抑此都の地ハ  
 四壘其所を得山河自然小城を成。因る今より山背を華て山城國と稱  
 る。ま末代皇孫此都小住せ。君平小民安るるを平。平安城と号と  
 ぬれたり。ま末代小惡王出。此都と他所小遷をせ。即ち惡王を誅伐と冬。

とも鎮護の神人を置。とて其長七尺の神人を造らせ。鍔の甲冑と者せ。太刀刀  
 を帶せ。鐵の弓箭を持せて。東山の峰を掘穿ち。西小向て埋收り。ちる。是乃代の  
 末まで王城鎮護の爲と。や。小將軍塚と稱する。是乃代。今以て圓山の頂小  
 あり。實も桓武天皇の聖慮を。筆のひ。神像あれ。道後世の。追天下の變  
 有んとすれ。此塚必と鳴動。と其凶變を示。其靈驗。諸人の知と。ち。茲小  
 王城の民小當て一座の靈山あり。日枝山と号せ。桓武天皇の御飯依僧。釈最澄  
 法師。帝小奏す。夫日枝山。六王城の東北小當て。時ち。ハ。將小。帝都の民。鎮  
 護。靈山小。つ。平安城の地勢。と見。衆山悉く。内小。向。ひ。も。尺日枝  
 山の。外小。向。ひ。是中華金陵の牛首山の。嶺金陵小背。ひ。如。四方の山悉く。内小。向  
 と。八地氣と洩と所なく。四方相生相剋の理小合。と。其故。奈何と。れ。先東方震  
 の木より東南。至。の木。向。木旺。木と旺。東南。巽の木より南。離の火。向。木。生。火。南



離の火より西南坤の土向火生土なり西南坤の土より西兌の金向土生金なり西兌の  
 金より西北乾の金向金旺金西北乾の金より北方坎の水向金生水なり儲北坎の  
 水より東艮の土向土刺水と相刺也余の三方八相相生一八旺するも民一方も相  
 刺するも身一方も之の理にて男八偶自然の勢ひ如是良八東も北も相生せと相  
 刺するも心より古より良の方位を慎む恐まの今日枝山の王城亦背ひも右の理も合て  
 滅亦万代不易の帝城とや命し勿論日枝山の王宮の良亦當ひも慎む恐のべきの  
 地位わくし拙僧彼山佛場を南に永く法燈を灯す王城の良と鎮め皇家を  
 守護し度いと表と捧て願えられも帝眷感浅くも即ち勅許在て日枝山  
 を最澄小給り急た伽藍を草創とるも宣旨を下しゆいり最澄大  
 悦ひ倫旨と頂戴して退出とれより日枝山を開れ工匠小委て先根本中堂を建  
 自作の等身の薬師如來の像を安置し其他の堂塔造を及く成就しられ

即ち一乘止観院と号し始て天台宗とされ是より日枝山を改め比叡山と号け  
 られも是 叡慮小比るも義をとるなりと後年最澄入寂の後弘仁十四年  
 額小往昔の年号の字と勅免あつて寺号と延曆寺とを号給ひたり此山中華  
 の天台山明が洞小似りて天台山とも又四明が洞とも呼たり東塔西塔横河を三  
 塔と号し又西塔小双輪標を建し是妙輪を轉し迷路を開く謂わも佛法  
 守護の表とも抑釈最澄法師とも俗性ハ三津氏小て父ハ近江國滋賀郡の  
 人なり其暴祖ハ後漢の獻帝の末裔なり獻帝ハ魏の曹丕のさ小弑せられ  
 ひ其子孫流落して日本渡り其人皇十六代應神天皇渠が王孫小て雲々洛世  
 を憐みの近州滋賀郡小て未地を給ひたり其地亦居住し代滋賀の郷士  
 最澄が父を三津百枝と呼頗る字才ありて佛書儒書を歴覽して博識なり  
 くれ心里俗甚く百枝を尊敬しりり然亦百枝五十才小過るまも子ありて



日枝山の林下の神社に一七日参籠し丹誠を凝して一子を授けつた。其誠心を神明感納し、いん程かく其妻妊娠し、称徳天皇の神護景雲元年丁未三月男子と生り、是則ち最澄なり。小児の頃より智才尋常の小児に勝り七歳より佛書儒書不涉操し佛法を慕ひ、十二歳の時大安寺の行表法師を戒師とし、剃髪して法名を最澄と呼び、唯識を学び華嚴經起信論ホを学び、究稍博識の才え高。桓武天皇の御飯依小預り比叡山を用基し天台宗の始祖とかり、最澄曾て鑑真禪師の傳する云義文句止観四教義維摩經の疏ホを究して歡喜し、猶一切衆生を化導せん、深理明師の傳授無てハ意の如くあり、とて入唐の望を起し、帝へ歎羨し、即ち勅許ありて延暦二十二年遣唐使藤原葛野原の船小釋空海大師とよみ、船にて唐土へこころ、台州の天台山に登り、國清寺の道邃法師小相見して、心三觀の去昔を

授り且菩薩三聚の大戒を付囑せられ、其より天台山の西南佛隴寺の行満座至小見て佛法の問答あり、小行満大に感し、昔智者大師後弟小經て曰我滅後二百余歳の後東海の國小生を彼土に佛法を興立せん、遺刻ありと傳聞し、果して今最澄三藏を相見、東より悦びて六祖妙樂大師より代秘藏せる經論書卷を惜みず、又最澄小附与し、汝此法文とあり、日本へ持還り法燈を挑け、一宗の祖師とあはせし、示されたり、最澄其後越叻の龍興寺へ入り、順曉阿闍梨小對面して三部灌頂の密教を受、又唐貞觀の沙門脩然小錫とて達南の一派牛頭山の法を受傳られ、素より最澄日本より行表和尚より北京神秀の禪法を学得し、又脩然と問答して禪の要義と尋求め、頗る領解する所多し、悦ばれり、斯く其次の年遣唐使歸朝あり、舟より出帆せられ、此時空海、猶唐土に留られ、借延唐



二十四年の夏帰朝し八月小京師へ入矢内ありて龍顔と拜し唐土にて得る所の經論疏記二百三十余部并五百卷を金字の法華經日金剛般若經智者大師の禪鎮白角如意等と献せられたるを帝大に睿感在り最澄を唐より天台の緒典籍を授りて歸し佛法真行よりて比類を絶功なりとて國師号と給り彼緒典籍天下に流布せられたる禁中の上紙を給りて和氣弘世小命がれ学生の能書と集て寫させのひより斯て最澄に信丹絨を疑して天台派を世に弘め後嵯峨天皇の弘仁十三年二月帝乃御宸翰小傳燈法師の紀を賜り同年六月遷化せられたる壽五十六也之最澄著述の書多し入皇五十六代清和天皇の貞觀八年八月傳教大師と謚号と賜りたり天台宗の末世まで敎条昌宗の偏此大師の法徳より扶桑皇統記後篇卷之一終

所かりたり

名古屋 大曾根 矢野平兵衛藏版之内狂俳書目

狂俳玉柏	七冊	浦浪集	二冊	五撰集	一冊
同太著集	五冊	末廣集	二冊	夢志集	一冊
同續太著集	一冊	苗代集	二冊	登賀惠里集	一冊
類題花の魁	七冊	六のち樽	二冊	嘉賀美具佐	一冊
花むしり	五冊	千代見呷	一冊	鐵夕々海下	一冊
三日月集	四冊	田植うぬ	一冊	吳竹集	一冊
愛知土産	二冊	清蘭集	二冊	花供養	一冊
多年富勺部	五冊	八重垣集	一冊	樂美集	一冊
増のくま	四冊	名古屋扇	一冊	百人集	一冊



